

バイオテクノロジー標準化支援協会ジャーナル No.141

SABS Journal No. 141

発行日：2023年5月20日

URL：<http://sabsnpo.org>

連休も終わり5月も半ばを過ぎてしまい、アジサイが咲き始めています。5月8日にはコロナ関係の制限も公式に緩和されました。ニュースを眺めると世の中では前代未聞の事件が国の内外で次々と起こっています。ウクライナ戦争も遂にロシアの侵攻以来1年以上経ちました。広島ではG7サミットが開かれ、各国の首脳が大勢訪日し、ウクライナの大統領も来ました。少しでも世界平和に役立つ成果を期待するばかりですが、皆様如何お過ごしでしょうか？

このSABSジャーナルは、当協会を設立した東京都立大学名誉教授奥山典生先生が2015年のご逝去直前まで執筆されて居られました。先生の没後も、奥山先生のご遺志を継いだ我々は当ジャーナルを定期的に発行し続けています。当協会をさらに発展させて行くため、また定例会もこれ迄通り継続して毎月開催し、専門家の方々に話題を提供して頂き、自由な討論を通じて勉強と親睦を深めています。“ほぼ途切れることなく”とは言え、コロナ禍のため2020年3月以来何度も中止となってしまいましたが、昨年末からやっと定期的に分けるようになりました。

コロナ禍については多少の上がり下がりはあるものの収束は本物のように見えます。：<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/data-all/> 実際は統計の取り方が変わったので以前とは比較出来ないのですが、心配されていた5月連休の大幅に増えた観光・帰省客の影響は見えていないようです。そしていよいよ連休明けの5月8日にコロナ症(Covid-19)を第2類感染症から第5類にしてマスクなしの世の中にする事になりました。厚労省は、マスク着用について個人の判断により屋外では原則不要、屋内では原則着用と言っていますが、実際は未だ多くのひとが外でも着けています。筆者の通うスポーツジムでも不要となりましたが、相変わらず大勢がマスクを着けています。後期高齢者の筆者ですが体調に気をつけながらもマスクはジムでは着けません。店や乗り物以外でも着けていません。ただし念のため6月はじめに第6回のワクチン接種を予定して居ます。皆さまは如何でしょうか？

さて前回116回定例会の話題は武野大策氏の「老化研究の最近の動き」でした。武野さんは2018年3月にも「オートファジーこぼれ話」という話題でお話頂いています(SABSジャーナルNo98)。奥山先生の研究室で学位を取得後、順天堂大学医学部生化学教室の木南英紀研究室でラットの肝細胞からオートファゴソームを単離しようという研究にも参加して居られました。オートファジーは老化にも深く関係していることもあり、最近の研究の流れについてお話いただきました。

武野さんのお話は先ず2016年に100歳で亡くなられた御父君(著名ジャーナリストむのたけじ氏)の最後に書かれた「百歳はめでたいでなくありがたい」という色紙の紹介で始まりました。「むのたけじ」は筆名で、本名は武野 武治(1915/1/2—2016/8/21)、東京外国語専

門学校を卒業後、報知新聞から朝日新聞に移り、太平洋戦争従軍記者としての経験・反省から、戦後は独立ジャーナリストとして「反戦・平和」を訴え続け、新聞『たいまつ』を創刊。農村・農業の進路、出稼ぎ問題、農民運動の在り方、地方文化やサークル活動について追求し、「自分の言葉に自分の全体重をかける」記事を書き続けた方です。[むのたけじ - Wikipedia](#)
武野大策さんは次男として最後を見取ったわけですが、「最後まで元気で逝った」というわけでは必ずしもなかったようです。巻末に付録として Wikipedia のコピーをご参考までに掲載しましたのでご参考まで。

栄養状態の改善と医療の進歩により平均寿命が 30 年ほど伸びて、今や「人生 100 年時代」と言われるようになっていますが、大切なのは所謂「健康寿命」が延びることです。近年、老化は病気的一种と捉え、その現象の解明が盛んになりました。武野氏のお話は、老化の要因として言われているオートファジーの低下、免疫機構の低下、テロメアおよび DNA メチル化などの遺伝子関連などを中心にして最近の研究の動きをお話しして頂きました。こうした現象を解明により得られた結果から、運動したり、食事制限したり、人々と交わることで寿命を延ばせるのではという当たり前のようで実は実行していない人が多い常識的な結論が得られています。そしてこの事は百寿者が日常生活を問うアンケート結果と食事制限を除いてほぼ一致していました。

定例会の後、筆者はたまたま 90 歳になった元 NHK アナウンサー山川静夫氏が流暢に話しているテレビ番組を見ました。対談相手の黒柳徹子さんも昔通り流暢にしゃべっていますがやはり 90 歳なので「これが健康寿命なのか」と感心していたら、次の日だったか、同じ番組で千玄室という方が大変元気にこれまた流暢にしゃべって居られ、何と現在 100 歳だと聞いてびっくり。この方は千利休から 15 代目という表千家の元家元ですが、大学卒業後特攻隊に召集、終戦直前に偶然除隊した生き残りでした。戦後は家元のお仕事の他、平和に関する講演や海外出張を続け、いまでもやって居られるとのこと。健康長寿の秘訣は、こうした活動と適度な食事と運動、そしてなによりも毎日心を静めて抹茶を頂く効果もありそうだと行って笑う姿は 60 代にしか見えませんでした。筆者のような後期高齢者の憧れです。健康寿命はだどつくづく思いました。

ところで健康寿命は昔からあったようです。今また大河ドラマになっている徳川家康も非常に健康に気を使い自分で薬草を栽培するなどして当時としては長寿(75 歳没)だったようです。この時代には、磯田道史著「日本人の叡智」(新潮新書、2011)によると、戦国時代の末期から徳川時代初めまで(1564-1663) 100 歳まで生きた江村専斎という医師がいたそうです。400 年も昔のことです。この人の祖父は織田信長に敗れた武将ですが、敗走して**京都に隠棲**。父親は聞香をよくしたことで豊臣秀吉にしばしば招かれたようで、附いて行った子供時代の専斎も会っているという。長じて医術と儒学を学び儒医として名声を得、加藤清正に仕え、清正の死後は京都に帰り、寛永年間に美作国津山藩主に招かれ、また和歌もよくしたので、熊本藩主細川幽斎とも交わったという波乱万丈の生涯でした。90 歳を超えても眼や耳が衰えることなく強壮であったので、時の天皇(後水尾天皇)の御所に参上を許され、天皇に養生法を尋ねられると、「養生の秘訣は別儀なし、飲食些く

思慮も些し、ただ些の一字を体得するにあり」と答えたということです。この「飲食些く思慮も些し」と言うのは、些は少しと言う意味なので、要するに「食は少なめ、考え過ぎない」ということです。まさに先ほど武野さんの言われた「食べ過ぎない・クヨクヨしない」ことです。

さて次回 117 回定例会 (5/27/2023) の話題は、本会理事の小林英三郎氏に再び御登場願います。小林さんは、インターネットで検索して広く情報を集め興味深いお話を過去に何度も提供して頂いています。今回の話題は、前号で触れた ChatGPT です。前号では実際に筆者もトライした例をご参考までに付記しました。Chat は英語の俗語でおしゃべりという意味ですが、GPT とは Generative Pre-trained Transformer の略だそうです。Generative というのは Creative に近い言葉ですが、創造というニュアンスは無いようで、また Pre-trained ということは予めやり方をいろいろ教え込んであるということ、そして transform は“変える一特に良い方向に”と辞書にあります。Chat で質問をすると、ネット上にある膨大なデータを調べて纏めて答えてくれるという AI 技術です。AI (Artificial Intelligence) は Intelligence (人間の知恵) を Artificial (機械にやらせること) ですが、機械 (Computer) は膨大なデータがネットにあれば、動作が超高速且つ疲れを知らないのです、この AI というやつは恐ろしい能力を持っているように見えますが、これがヒトの‘思考能力’を超えるのかどうかは大問題の一つです。他にもいろいろな問題があります。前号では、アメリカの本社から社長 (CEO) が来日して岸田首相にも面会したというニュースを紹介しました。一方、同じころ ChatGPT の開発に加わったという Google の元社員の人でも来日して大学で講演したりして話題となりました。この人は ChatGPT が非常に問題のあるアプリで禁止すべきであると主張しています。このアプリは世界中の‘ネット上にある膨大な情報を根こそぎ収集’してそれを AI 技術で処理するわけですが、この‘ネット上にある膨大な情報を根こそぎ収集’という作業を一企業乃至そのグループが行うことは、そのグループが無断で世界中の個人のデータを把握しているということになるわけです。この人 (Meredith Whittaker 博士) はこう言っています:「私が考えるリスクとは、これらの技術やシステムがごく少数の企業によってコントロールされ、公的な監視がおよばず、どのような用途で使っているかも開示されず、システムが互いに影響し合っただらブラックボックス化しているということです」。[Meredith Whittaker 氏講演会「人工知能の政治経済：監視、権力集中など“AI”が抱える問題」※逐次通訳付き・YouTube](#) 既にイタリアでは政府が禁止したとか、アメリカや EU でも公的機関では使わないようにしているとか報道されています。一方我が国では、岸田首相が「活用したい」と発言したりしています。今 (5/20/2023) 開かれている G7 サミットではこれも議題に上がっています。

学生の宿題レポート、就職試験の提出文章など上手に書いて居る例があるようです。資格試験にチャットが合格点を取った話も話題となっています。ただしよく考えると、資格試験の場合は、家でやる宿題と違って、試験場にはスマホなど持ち込めないのが問題なさそうです。実際には持ち込めないスマホで膨大なカンニングをやるわけですから合格は当たり前です。宿題とか就職論文などは禁止しても使ったかどうかの判定が難しそうです。ChatGPT が小説や漫画を書く話題も賑やかです。さらに ChatGPT を使って制作したいいわゆる芸術作品が既存の‘芸術’を一部使ったり、多少変えたりで登場し、それらが何と賞を貰ってしまったという話題もマスコミを賑わせています。これが著作権侵害問題の関係で騒がれているようです。もともと有名作品をもじったりからかったりする

Parody といわれる作品について著作権問題がこれまでよく話題となっています。更に最近では Andy Warhol というアメリカの有名な‘芸術家’の作品についてこの著作権問題が言われ始めて居るという報道もあります。彼の作品はモンローの加工した肖像写真やスープの缶詰の写真みたいなのを沢山並べただけの作品などが有名ですが、「お宝鑑定」などでは滅茶苦茶に高い値がつきます。筆者は昔からこの作家のモノは Parody の一種だろうと考えていたので「やっぱり！」と思いました。これから ChatGPT で作った‘新発見’の Warhol が続々出てきそうです。閑話休題。

数日前、さる大学の学園祭で学生が企画した AI 裁判官による模擬裁判がテレビで報じられました。裁判の結果、AI 裁判長は、ほぼ人間の陪審員たちの結論と同じ判定をしたようです。

ということでぜひ皆さまも Chat をトライされて当日は皆さまの結果を出し合い、小林さんを中心に話題を盛り上げたいと考えています。よろしく。

当協会のもう一つの大きなプロジェクトはインターネットジャーナル「医学と生物学」の発行です。緒方富雄博士が 1942 年に創刊した総合学術雑誌ですが、2013 年に休刊となってしまいました。奥山先生はこの雑誌の復刊を目指して居られたのですが、ご存命中には実現出来ませんでした。その後我々後継者はいろいろ努力した結果、2018 年にこの学術雑誌をインターネットジャーナルとして復刊することが出来ました。また創刊号からのバックナンバーも収録し、ホームページから閲覧出来ます：<https://medbiol.sabsnpo.org/EJ3/index.php/MedBiol/issue/archive>

次回バイオテクノロジー標準化支援協会 (SABS) 第 117 回 定例会

日時: 2023 年 5 月 27 日(土) 13 時~17 時

場所: 八雲クラブ(東京都立大学同窓会) 渋谷区宇田川町 12-3 ニュー渋谷コーポラス 10 階

話題: 「ChatGPT に訊く ChatGPT」

提供: 小林英三郎 SABS 理事

定例会会場八雲クラブへの道順: 渋谷駅ハチ公交差点から井の頭通りの坂道の右側を東急ハンズの看板目指して上ります。ハンズの手前で右の急坂を登って行き、坂の途中で左に曲がりまた少し坂道を行き登り切った所で新しいパルコ高層ビルの反対側にある古い高層マンションがニュー渋谷コーポラスで、入口の階段奥のエレベーターで 10 階に上り直ぐ左隣の部屋が八雲クラブです。

定例会は、現在、原則として毎月第 4 土曜日に開催しています。7 月と 8 月と 11 月はお休みです。なお会場の都合で第 4 土曜日ではなく他の土曜日(今回は第 3)となることがあります。その場合はお知らせいたします。なお 6 月は予定通り第 4 土曜日の 6/24 です。

このジャーナルはバイオテクノロジー標準化支援協会(SABS)会員だけではなく、広い意味でのバイオテクノロジー関係の方々にも配信しています。現在、このジャーナルを読んで下さる方は 600 名近く居られます。殆どの方が奥山先生の関係で、先生の広がった人脈に改めて驚いていますが、ぜひ読者の方々からも話題提供をして下さる方をお待ちしています。当 SABS ジャーナルのホームページ https://sabs.sabsnpo.org/sabs_j/ ではジャーナルの最新号を含めたバックナンバー

一が収録してあります。またお知り合いの方でこのジャーナルを配信希望の方が居られましたら会員である必要はありませんので筆者のアドレス thiyama@athena.ocn.ne.jp に直接お知らせください。また配信停止、新規会員登録、アドレス等の登録情報変更等のご希望やウェブサイトに関するご意見もメールでお知らせください。

(文責 檜山哲夫)

特定非営利活動法人バイオテクノロジー標準化支援協会

NPO Supporting Association for Biotechnology Standardization (SABS)

〒173-0005 東京都板橋区仲宿 44-2 URL:<http://sabsnpo.org>

理事：荒尾 進介、小林 英三郎、田坂 勝芳、松坂 菊生、小川 哲朗、川崎 博史、檜山 哲夫

監事：堀江 肇

ネット管理：川崎 博史、田中 雅樹

付録：

むのたけじ ([むのたけじ - Wikipedia](#) より引用)：

経歴：秋田県仙北郡六郷町（現：美郷町）の小作農民の家に生まれる。県立横手中学校（現：秋田県立横手高等学校）で教師を務めていた石坂洋次郎 に、国語・作文・修身を教わった。1932年に東京外国語学校（現：東京外国語大学）西語部文科（文学）に入学。親の仕送りで学生生活を続けることが難しくなったので、1学年を終わったところで外務省の書記生になろうとしたが「満18歳では若すぎる」との理由で願書は却下された。その頃から社会主義の本を熱心に読むようになった。1936年（昭和11年）3月に大学を卒業して『報知新聞』記者となり、秋田支局や栃木支局、本社社会部で働く。近衛文麿、東条英機、鈴木貫太郎ら政権中枢の政治家・軍人、画家の藤田嗣治、小説家の火野葦平らにインタビューした。1940年（昭和15年）朝日新聞社に入社、中国、東南アジア特派員となった。当時の日本は日中戦争のさなかで、仏印進駐により東南アジアへも勢力を広げており、対立を深めた米英と1941年（昭和16年）12月に太平洋戦争へ突入した。戦争中盤の1943年（昭和18年）、社会部に戻る。魯迅の作品に心をひかれる。数え4つの長女ゆかりを疫痢で失う。1945年（昭和20年）8月15日の敗戦を機に、権力の統制に屈服して太平洋戦争の戦意高揚に関与した責任をとり退社した。その時、むのは、民衆が蜂起することを予想し、激動の渦中に飛び込む覚悟をしていた。

1946年、愛知県名古屋市に赴き『中京新聞』の仕事を手伝う。1947年（昭和22年）11月5日、生まれた女の子に「あじあ」と名づける。1948年（昭和23年）元旦、親子5人で秋田県横手市に帰郷、2月にはタブロイド版の週刊新聞『たいまつ』を創刊した。『たいまつ』と名づけた理由を、むのは、以下のように述べている。「戦時中の汚れにもまれながらも失わなかった(社会体制の変革を待望する)一点の火種をどんなに小さくとも一本の焰に変えたい気持ちだった。」

なお、創刊号には石坂洋次郎が寄稿している。『たいまつ』では、農村、農業の進路、出稼ぎ問題、農民運動の在り方、地方文化やサークル活動について、しつように追求した。「自分の言葉に自分の全体重をかける」記事を1978年（昭和53年）の780号まで書き続けた^[9]。

魯迅のほか、レーニン、毛沢東のそれぞれの思想と戦闘ぶりに特に深く影響を受けた。

1955年（昭和30年）の第27回衆議院議員総選挙には秋田2区から無所属で立候補したが落選した。晩年は、戦争の記憶を伝えるため、テレビ番組や講演会にも積極的に出演した。

2012年、岩手県花巻市の「宮沢賢治学会 イーハートーブセンター」から第22回イーハートーブ賞を受賞。2015年、東京外国語大学より、80年越しの卒業証書が渡された。

2016年8月21日、老衰のため、さいたま市内の二男宅で死去。101歳没。

週刊新聞『たいまつ』全780号は、横手市立図書館でデジタル撮影され保存されている。また、所蔵していた図書、書簡や講演の原稿、新聞の切り抜き等が横手市立図書館に寄贈され、雄物川図書館で常設展示されている。

名を冠した「むのたけじ地域・民衆ジャーナリズム賞」が設けられている。